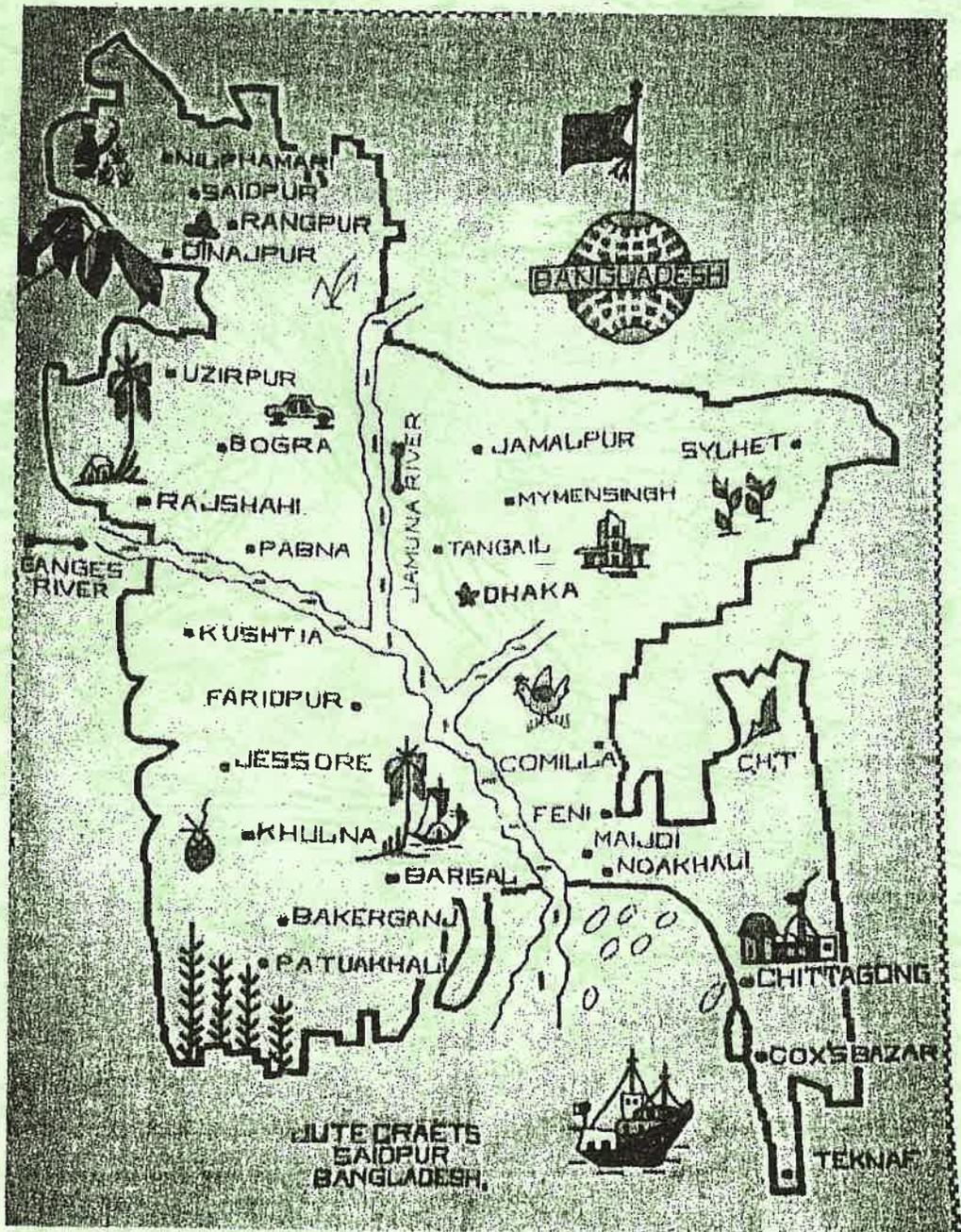


第16回 (1999・冬期)

ACEF寺子屋訪問ツアー



スタディー・ツアーでは、よくボート・トリップをします。今年、カティラチームも最後の学校訪問は、船で南へ1時間ほど下ったイースト・バグダー学校を訪ねました。例によって大歓迎、ココナッツジュース、ビスケットのほか、ゆで卵からミスティ（甘いお菓子）まで出してくださいました。村長さん、村の教会の牧師さん、主だった方々、総出の歓迎ぶりに、感謝しつつ村を後にしました。

そして、再びエンジン・ボートで帰途につきました。メンバーは、思い思いにボートの屋上へ乗り、景色を眺めたり、話し合ったり、楽しそうに過ごしていました。ちょうど、SEPのゴメスさんと私、ふたりだけが船底にいました。船底では、焼玉エンジンがうなり、その側で少年がいっしょうけんめい水かきをしていました。聞けば13歳とのことでしたが、身体も小さく、とてもその歳には見えませんでした。でも、とても健康そうで、いつもにこにこしており、ちょっと、はにかみやのようでした。というのは、往きに、みんなでミスティを食べた時、その少年にもあげたのですが、「いいです。いいです。」と笑いながら遠慮するだけで、なかなか食べようとしなかったのです。

私は、少年に関心をもって、ゴメスさんに通訳をお願いして、いろいろと聞いてみました。「何年生?」「学校へは行ったことがない。」「家族は?」「お父さんと兄弟が4人。」「お母さんは?」「小さい時、死んだ。」「学校へ行きたい?」「うん、いきたいよ。」私は、ゴメスさんに少年の家の近くにSEP学校がないのかを尋ねました。近くに学校はないとのことでした。いろいろなことを聞くうちに、少年はとても賢く、また、機会があれば、べんきょうをしたいと強く望んでいることが分かりました。しかし、近くには学校がないのです。「何ということだ!」。たまたまこの地に生まれたということで、教育を受ける機会が失われている。

私は何とかして、彼を励ましたいと思いました。言葉だけでなく、何か、しるしをもって。ボールペンでもないかと探しましたが、何もありません。そのうちに、ボートは目的地に着きそうになってしまいました。私はとっさの思いで、着ているシャツを脱いで少年に着せました。彼はあっけにとられたような顔をしていましたが、私が手を握って笑うと彼もにっこりして、別れました。

最後の日、みんなで1週間の感想を述べあいました。その時、ゴメスさんはこう言ったのです。「自分は、ベンガル人として恥ずかしい。あのボートの少年には、わたしがシャツを脱いででもあげるべきだった。何故なら、私たちは同じ民族なのだから。それは、ほんとうは、私の責任なんだ。それを私ができなかったのは、恥ずかしい。」ゴメスさんは涙をおさえながら、こう話しました。

私は、このゴメスさんの話を聞いて、「SEPは、大丈夫だ。」と思いました。こんなに美しい魂をもった人がいるのだから。アルバートさん、ファルークさん、ヘモントさんみんな、純粹で、美しい魂をもった仲間です。ありがとうございます。

ACEF と SEP

ACEF(アジアキリスト教教育基金)

ACEF は、バングラデシュの子ども達に「寺子屋を贈ろう」と1990年に発足し、バングラデシュで幼児、初等教育に取り組んでいるSEP(Sunflower Education Program)のCO-WORKERとして活動しています。ACEF 設立の第2の目的は、日本において、「発展途上国の諸問題に積極的に取り組む青年を育成すること」です。年2回のスタディーツアーにより、多くの学生が関心を持ち、バングラデシュについて、自身の勉強の分野に取り入れたり、周囲に向けて様々な活動をしています。東京では、スタディーツアー経験者を中心に、3つのグループが活動しています。

SEP(Sunflower Education Program)

SEP とは、1990年、ミナ・マラカール女史を中心に設立された、ベンガル人によるキリスト教系のNGO(民間団体)です。首都ダッカのスラム街から、特に女子の幼児、初等教育を中心に取り組み、現在では4地区で活動しています。昨年アルパート・マラカール氏が責任者に就任しました。SEP では、学校を建てたいと願っている村人と協力して学校を作っていくので、村人も自分達の学校として大切に管理しています。原則として先生には、教育を受けた経験のあるその村の女性になります。これは、女性の収入になるばかりでなく、家庭での、地域での女性の地位の向上につながっています。その他、女性の識字教育、女子高校生への奨学金、卒業生のための職業訓練学校などに取り組んでいます。

ACEF と SEP の関係

ACEF は、「ベンガル人が、ベンガル人のための教育を行うのが理想」であるとしています。ACEF と SEP は、日本人が主体で現地で活動するのではなく、CO-WORKER としての深い信頼の中で対等に活動しています。発足から約10年、この2つの団体の活動が守られ発展してきた原動力はまさにここにあります。



アルバートさんのお話から

SEP の現状

現在、ダッカ市内のミルプール地区、ダッカ北東の農村地のプーパイル地区、北部のジャマルプール地区、南部ポリシャルのカティラ地区の4カ所で活動しています。

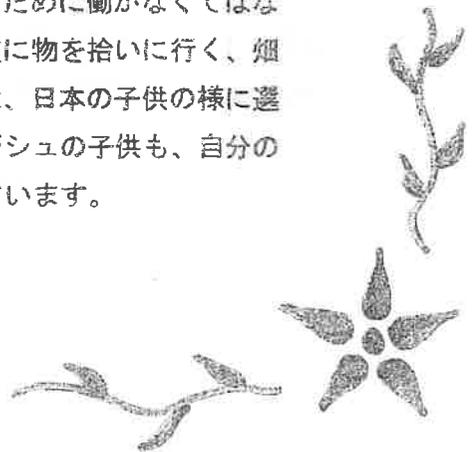
1990年発足当時の生徒数は、4百数十人でしたが、現在では約8千人の生徒がいます。クラスは、4歳児からの Feeder(幼稚園)クラスと、1年生から5年生までの小学生のクラスがあります。しかし、1年生に100人入っても、5年生まで卒業できる子供は、半分の50人程度になってしまいます。その50人の内、高校教育を加えて、10年教育が受けられる子供は、たったの4人というのが現状です。小学校を出ただけでは、やはり十分な仕事にも付けないので、10年の教育を、多くの子供が受けられるようにすることが目標になっています。この現状改善のために、女子高校生の奨学金制度に加えて、手に職を持つための、職業訓練学校の活動が始まりました。

約10年間での変化

発足当時は、女子は13歳、14歳で結婚することが多かったのですが、女子も教育を受けるようになり、女子教育に対する考え方が、農村部でも変化が見られるようになりました。少しでも、教育を受けた女性は教育の重要性を知り、自分が母親になった時にも、子供を学校に行かせるようになるでしょう。SEPが、女子教育に特に力を入れている理由はここにあります。この女性教育が、社会を変えていく大きな可能性を持っています。

日本の子供とバングラデシュの子供

バングラデシュの子供達は、小さい子供も、家族のために働かなくてはなりません。朝早くから、売れそうな物がないか、道に物を拾いに行く、畑の手伝いをする、父親の仕事を手伝う。子供達には、日本の子供の様に選択をする余地が残されていないままです。バングラデシュの子供も、自分の意思で選択して生きていける社会にしたいと願っています。



第16回 バングラデシュ寺子屋訪問ツアー
全体の日程

- 2月26日 (飛行機の5時間遅れを経て) ダッカ着
Friday
- 2月27日 午前 アルバートさんによるSEPの説明
Saturday 午後 買い物
- 2月28日 午前 A・Bチーム分かれてミルプール地区のSEP School 訪問
Sunday 午後 ダッカ博物館へ行く、教会で礼拝参加
- 3月 1日 日帰りでプーバイルへ
Monday (SEP School 訪問、SEPの先生とのディスカッション)
- 3月 2日 Bチーム カティラへ
Tuesday Aチーム ジャマルプールへ
- 3月 9日 両チーム ダッカへ戻る
Tuesday
- 3月10日 午前 最後のシェアリング
Wednesday 午後 SEPの子ども達によるカルチャーショー
SEPスタッフと夕食会
- 3月11日 午前 買い物
Tuesday 午後 マラカール先生を迎え、
SEPスタッフと最後のディスカッション
日本へ

ディスカッション

ACEFメンバー→SEPの先生

Q. 教師として教えていて最も難しいと思うことは何か？

- A. ・子どもの関心をいかに引き付けるか。
・様々な試みを理解してくれない時どうするか。
・漁や米の収穫期に子どもが休んでしまうため、一斉理解が難しくなる。

Q. どのようなところにやりがいを見つけるか？

- A. ・子どもが理解してくれて、正しい答えをしてくれた時。
・ドロップアウトした子どもがきてくれた時。
・試みた教材で理解してくれた時。
・教師になることで社会的に認められる。

Q. SEPの学校ができることに対して村人に不安はなかったか？

- A. 学校教育が地域の宗教を変えてしまうのではないかと危惧したが、そのようなことはなく、また教えに行くことでお金をもらい、収入を得るので家庭内での発言権が増した。村の人からも尊敬されるようになった。

Q. 1ヶ月のお給料は？

- A. 600~700タカ

Q. 知識のほかに学校教育で教えるものは？

- A. 宗教、集団生活のルール、環境問題

SEPの先生→ACEFメンバー

Q. 結婚はどうか？（先生達の90%以上が親の決めた人と18歳前後に結婚している）

Q. お米を1日どれくらい食べるか？

Q. 学校以外に何をしているか？

Jamal Pool

ジャマルプールには小学校が5校、センター(Feeder~Grade5までそろっていない学校)が5つある。その他にも成人女性のための識字学級が1月から5つ、4月から更に5つ開かれている。全体で教員が34名、生徒が1403名。また、SEPから奨学金を受けている女子高生が61名いる。

《日程》

- | | | |
|---------|----|-------------------------|
| 3月2日(火) | | ジャマルプールへ |
| 3日(水) | 午前 | バスチョラスクール訪問 |
| | 午後 | フリー(夕方 マーケットへ) |
| 4日(木) | 午前 | コトバリスクール訪問 |
| | 午後 | コマリヤスクール訪問 |
| 5日(金) | 午前 | ボート・トリップ |
| | 午後 | カルチャーショー(SEP スタッフによる夕食) |
| 6日(土) | 午前 | ボイタマリースクール訪問 |
| | 午後 | フリー |
| 7日(日) | | ガロ地区へ |
| | | 教会の礼拝参加 |
| | | ディブラクマスクール、ディモルトラスクール |
| | | ボシノッパラスクール訪問 |
| 8日(月) | 午前 | モホンプールスクール訪問 |
| | 午後 | 日本食パーティー |
| 9日(火) | 午前 | SEP スタッフとディスカッション |
| | 午後 | ダッカへ |

メンバー

- ・寺島 昭二 (リーダー) ・井上 儀子 (サブリーダー) ・江澤 華代
- ・遠藤 聡子 ・小林 淑恵 ・菊池 亜紀子 ・富井 寿恵 ・吉田 祥子

ジャマルプールスタッフ紹介



ショフイクさん

ジャマルプールのオーガナイザー。やさしく話しかけるといつも笑顔で答えてくれる。ただ…いびきはSEPスタッフの中でも3本の指に入る。



ハビブさん

スタッフ内で唯一ひげを生やしているスーパーバイザー。「なになに？」が口癖 (ベンガル語で「なに」はおばあさん)。メンバーが「何？」と言うと笑って自分も「なになに」と言う。



ムクレスさん

かっこよくてさわやかなスーパーバイザー。ハビブさんと親友で、2人で暮らしている。



パセットさん

98年秋からSEPスタッフになった新人スーパーバイザー。暇があれば買った日本語の本で日本語を勉強したり、お気に入りのピアニカを吹く。



モタレブさん

ジャマルプールオフィスの雑務を担当しており、私たちの身の回りの世話をしてくれた。部屋に出た4匹のゴキブリを表情1つ変えずに素手でとってくれる頼もしい人。

3月2日 <Tuesday>

カティラへ出発するBチームを見送った後、朝食を食べ、7:40頃ジャマルプールへ出発。車で駅まで行き、そこから汽車に4時間乗り、又車で1時間程行って、14:00頃これから一週間お世話になるジャマルプールオフィスに着きました。その後はずっとフリータイムだったので皆それぞれ水浴びをしたり、洗濯をしたり、昼寝をしたり、散歩に行ったりしていました。

「あきことかよちゃんが近所の村の子ども達をたくさんひきつけて帰って来たので、その子ども達とお話したり、遊んだりして、さっそく農村の子ども達と関わることができたので嬉しかったし、とても楽しい時間でした。— ダッカよりもさらに田舎の地に来て1日生活しただけで、今まで日本にいたときの生活とのギャップを強く感じ、色々なことを考えることができました。この気持ちを忘れずに持ち続けていられればと思います。」— 淑恵の日記より

おどろきシリーズI

お風呂: 水あび…シャワーすらない。暗い。早く入らないと水だから寒い、慣れると気持ちいい

トイレ…紙がない、手で拭くななんてびっくり、慣れると気持ちいい

汽車…窓から入るほこりがすごい。窓ガラスが割れていた。車内販売、車内での物乞いの人々にびっくり。

井戸…しくみが知りたかった。水枯れない? 重い。楽しい。

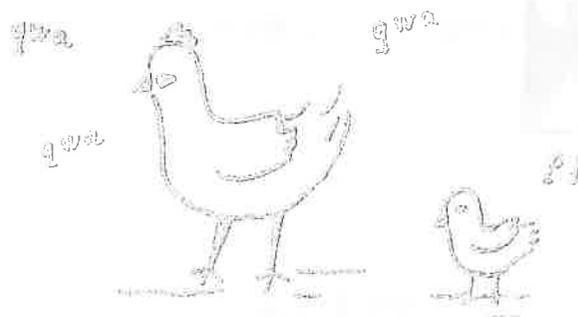
停電…ランプ(ハリケーン)を使うこと、至る所に設置してくれることにびっくり。ろうそくのしんが燃えないことにびっくり。

かや…狭い、身動きがとれない、かやの中に蚊が入ると最悪。思ったより快適。

ビーチベッド…狭い、寝返りうてない。すぐつぶれる、倒れる。

ゴミ…庭の隅へバラまくことにびっくり。

ニワトリ…庭ニワニワ…。ひよこもいた



ディスカッション

ACEFメンバー→SEPの先生

Q. 教師として教えていて最も難しいと思うことは何か？

- A. ・子どもの関心をいかに引き付けるか。
・様々な試みを理解してくれない時どうするか。
・漁や米の収穫期に子どもが休んでしまうため、一斉理解が難しくなる。

Q. どのようなところにやりがいを見つけるか？

- A. ・子どもが理解してくれて、正しい答えをしてくれた時。
・ドロップアウトした子どもがきてくれた時。
・試みた教材で理解してくれた時。
・教師になることで社会的に認められる。

Q. SEPの学校ができることに対して村人に不安はなかったか？

- A. 学校教育が地域の宗教を変えてしまうのではないかと危惧したが、そのようなことはなく、また教えに行くことでお金をもらい、収入を得るので家庭内での発言権が増した。村の人からも尊敬されるようになった。

Q. 1ヶ月のお給料は？

- A. 600～700 タカ

Q. 知識のほかに学校教育で教えるものは？

- A. 宗教、集団生活のルール、環境問題

SEPの先生→ACEFメンバー

Q. 結婚はどうか？（先生達の90%以上が親の決めた人と18歳前後に結婚している）

Q. お米を1日どれくらい食べるか？

Q. 学校以外に何をしているか？

Jamal Pool

ジャマルプールには小学校が5校、センター(Feeder~Grade5までそろっていない学校)が5つある。その他にも成人女性のための識字学級が1月から5つ、4月から更に5つ開かれている。全体で教員が34名、生徒が1403名。また、SEPから奨学金を受けている女子高生が61名いる。

《日程》

- | | |
|---------|---|
| 3月2日(火) | ジャマルプールへ |
| 3日(水) | 午前 バスチョラスクール訪問
午後 フリー(夕方 マーケットへ) |
| 4日(木) | 午前 コトバリスクール訪問
午後 コマリヤスクール訪問 |
| 5日(金) | 午前 ボート・トリップ
午後 カルチャーショー(SEP スタッフによる夕食) |
| 6日(土) | 午前 ボイタマリースクール訪問
午後 フリー |
| 7日(日) | ガロ地区へ
教会の礼拝参加
ディブラクマスクール、ディモルトラスクール
ボシノッパラスクール訪問 |
| 8日(月) | 午前 モホンプールスクール訪問
午後 日本食パーティ |
| 9日(火) | 午前 SEP スタッフとディスカッション
午後 ダッカへ |

メンバー

- ・寺島 昭二 (リーダー) ・井上 儀子 (サブリーダー) ・江澤 華代
- ・遠藤 聡子 ・小林 淑恵 ・菊池 亜紀子 ・富井 寿恵 ・吉田 祥子

ジャマルプールスタッフ紹介



ショフィークさん

ジャマルプールのオーガナイザー。やさしく話しかけるといつも笑顔で答えてくれる。ただ…いびきはSEPスタッフの中でも3本の指に入る。



ハビブさん

スタッフ内で唯一ひげを生やしているスーパーバイザー。「なになに？」が口癖 (ベンガル語で「なに」はおばあさん)。メンバーが「何？」と言うと笑って自分も「なになに」と言う。



ムクレスさん

かっこよくてさわやかなスーパーバイザー。ハビブさんと親友で、2人で暮らしている。



バセットさん

98年秋からSEPスタッフになった新人スーパーバイザー。暇があれば買った日本語の本で日本語を勉強したり、お気に入りのピアニカを吹く。



モタレブさん

ジャマルプールオフィスの雑務を担当しており、私たちの身の回りの世話をしてくれた。部屋に出た4匹のゴキブリを表情1つ変えずに素手でとってくれる頼もしい人。

3月2日 <Tuesday>

カティラへ出発するBチームを見送った後、朝食を食べ、7:40頃ジャマルプールへ出発。車で駅まで行き、そこから汽車に4時間乗り、又車で1時間程行って、14:00頃これから一週間お世話になるジャマルプールオフィスに着きました。その後はずっとフリータイムだったので皆それぞれ水浴びをしたり、洗濯をしたり、昼寝をしたり、散歩に行ったりしていました。

「あきことかよちゃんが近所の村の子ども達をたくさんひきつけて帰って来たので、その子ども達とお話したり、遊んだりして、さっそく農村の子ども達と関わることができたので嬉しかったし、とても楽しい時間でした。— ダッカよりもさらに田舎の地に来て1日生活しただけで、今まで日本にいたときの生活とのギャップを強く感じ、色々なことを考えることができました。この気持ちを忘れずに持ち続けていられればと思います。」—淑恵の日記より

おどろきシリーズI

お風呂…水あび…シャワーすらない、暗い、早く入らないと水だから寒い、慣れると気持ちいい

トイレ…紙がない、手で拭くなんてびっくり、慣れると気持ちいい

汽車…窓から入るほこりがすごい。窓ガラスが割れていた。車内販売、車内での物乞いの人々にびっくり。

井戸…しくみが知りたかった。水枯れない？ 重い、楽しい。

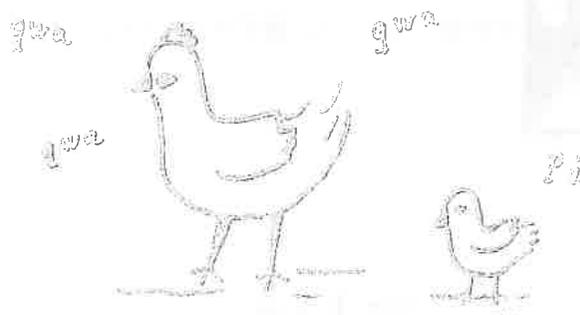
停電…ランプ(ハリケーン)を使うこと、至る所に設置してくれることにびっくり。ろうそくのしんが燃えないことにびっくり。

かや…狭い、身動きがとれない、かやの中に蚊が入ると最悪。思ったより快適。

ビーチベッド…狭い、寝返りうてない。すぐつぶれる、倒れる。

ゴミ…庭の隅へバラまくことにびっくり。

ニワトリ…庭ニワニワ…。ひよこもいた



3月3日 (Wednesday)

バスチョラスクール

「バスチョラスクールは以前竹造りだったのが今ではレンガ造りになったとのこと。午前中はFeeder クラス、Grade1, 2 の3クラスが授業をしていました。先生がどの子どもにも目を向けて授業をしているのが印象的でした。理解力も年齢もバラバラな中でできるだけ多くの子どもの興味をひき、授業を進めるといのは本当に大変なことだと思います。子どもの関心をひく教材などの工夫も必要だけれども、何よりも子どもに「これを伝えたいな」「これを教えたいな」という熱意が大切だと思います。そうしたものがSEP スタッフ、寺子屋の先生からは感じられました。11:00 頃は外でなわとび、ボール、たこあげなどで遊びました。子どもがキャーキャーと走りまわっているのを見ると私もじっとしておられず、一緒にキャーキャーしました。バングラデシュに限らず、子どもが無心に遊んでいる姿は日本であってもすごく元気づけられます。」

—聡子の日記より—

マーケット

オフィスから5分歩いたところにある市場を見に行った。といっても店ごとに建物があるわけではなく、道の両脇にござをひいてその上に商品が置いてあった。野菜の通り、魚の通り、米の通り…と商品の種類ごとに店がまとまってあった。食品だけではなく食器や床屋もあり、寺島先生は散髪に行った。料金は20 タカ、日本円にして60円、安い…。

おどろきシリーズII

もちろんここに洗濯機はない。私たちは手で自分の衣類を洗う。でもなかなかきれいにならないし時間がかかった。ところが…私たちの食事の世話をしてくれた2人のおばさんは違かった…。私たちが井戸のところで洗っていると、おばさんが水を汲みに来た。私たちの洗い方を見て呆れ果てたようで、私たちから洗濯物を取り上げ、シャカシャカ洗い始めた。そのスピード、手つき…あっという間に真っ黒だった洗濯物が真っ白になり、私たちは感動の拍手。あの細い腕のどこにそんな力が…。

3月4日<Thursday>

コトバリschool

コトバリschoolはこの1月にできたばかりで先生の家で床にすわって授業をしていました。ここができる前は子ども達は他の遠いところまで通っていたので、村はSEPに学校を作って欲しいと頼んだのですが、SEPはまずSEPの方針として村主体の学校にするため村の建物で開校することにしました。

コマリヤschool

コマリヤschoolは午後に行ったので、3、4、5年生の高学年のクラスが授業をしていました。

「私は3年生の教室に入った。子ども達は皆、長い文章をすらすらと、大きな声で読んでいて、手もよく上げるし、勉強していますという感じでした。日本では先生に反発して、分かっているのにわざと手を上げない子どももいます。それに勉強が嫌だから学校をさぼる生徒までいます。こう見ると日本の子どもは勉強をする意味さえ分からずに、ただひたすら言われたとおり勉強していて自由がないように思えます。日本も昔はバングラデシュのような教育をしていたようですが、(青空教室、教科書、ノートが少ない)文明が発達して今のような自由のない教育となってしまいました。私が思うにバングラデシュの文明が発達しても日本のようにはなっていないです。逆にあまり発達してほしいくらいです。」—華代の日記より

3月5日<Friday>

Boat Trip

金曜日はこちらの休日。学校もお休みなので、午前中boat tripへ行きました。

「途中船を降りてシェルブールという村を訪ねました。一区画のバりに20人の一家族が住んでいるということでした。たくさん集まった子どもたちの中で「学校にいてる子は？」と尋ねて手を挙げたのは4人。HemontoさんはここにもSEPの学校を建てたいと思っているけれど、村人たちは川の流れるによって移動するし、ジャマルプールの行政区外なので手続きが困難だと言っていました。でもfeederクラスだけでも開けたらというのが彼の(SEPの?)計画にあるそうです。」—儀子さんの日記より

サリー・メンディ

午後コトバリschoolとジョカschoolから先生方が訪ねてくださり、私たちにサリーを着せてくれ、メンディもしてくれました。その後、ミニ・カルチャーショーもあり、子どもや先生が歌を歌ったりしてくれました。

スタッフによる夕食

初の試みということだそうですが、夕食はSEPスタッフが作って下さいました。「男ばかりがたくさん台所に入り、いつも料理なんてしないというので心配でしたが、その材料の多さにびっくり。いいにおいがして覗きに行くと、そのメニューの多さにびっくり。私たちメンバーも入り込み、これは何？ これはどうするの？ と質問攻めで、つまみ食いをしたり、スタッフとの仲が急に近づき、とてもよい関係ができました。

スタッフ夕食メニュー

- 1、 シシカバブ(牛肉の串刺し)
- 2、 揚げだんご(ダルと小麦粉)
- 3、 なすを薄くスライスして天ぷらのようにしたもの
- 4、 魚の炒め煮
- 5、 小魚の唐揚げ
- 6、 牛肉と玉ねぎを炒めたものを、ダルと小麦粉とじゃがいもをすりつぶしたもので包んでスティックをつけて揚げたもの
- 7、 包み焼き うりの葉っぱ(かぼちゃの葉のようなもの)にエビのすり身とダルを練ったものを包んで揚げる
- 8、 炊き込みごはん(キャベツ、何種類かの豆・さやいんげんなど具たくさん)
- 9、 シェマイ(イードのお祭りの時に食べる甘いヌードル・お菓子)のローリエ、カルダモン入り
- 10、 トマト、レモン
- 11、 りんごとみかん(デザート)

みんなおなかいっぱい〜いで、笑顔もいっぱい〜い。食事中はショフィークさんのいびきの話で盛り上がりました。アマルル ペト ボレゲチェ }一儀子さんの日記より



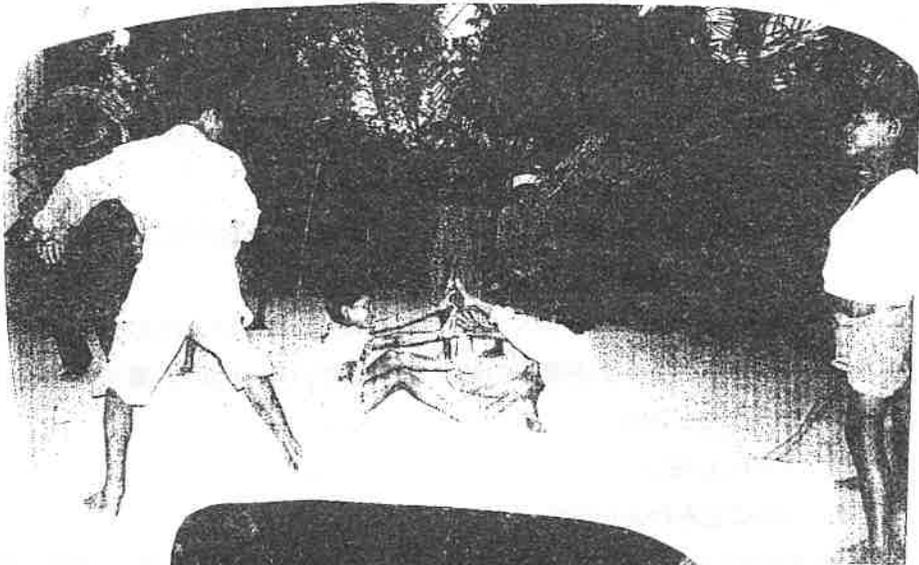
この日夕食の後、どこからか両親に連れてこられた女の子が日本の詩を暗唱できるということで、「鳩ぽっぽ」を暗しょうしてくれました。こんな所で「鳩ぽっぽ」を聞くなんてびっくりでした。また、日本の詩などが載っている本も見せてくれました。そんな風に日本に関心を持ってくれている事が嬉しかったです。

3月6日<Saturday>

ポイタマリschool

午前中は去年できたポイタマリschoolへ訪問に行きました。去年まで識字率0%だったということでFeeder、Grade1、2、のクラスがありました。去年の洪水のため軒下で野外授業をしていました。

午後はフリータイムで夕方、バセットさんの下宿している所へみなで遊びに行きました。帰る時子ども達がついて来てオフィスの庭でしばらく遊んでいきました。何も遊ぶものがなくても体全体を使って生き生きと遊んでいる姿が印象的でした。



3月7日(Sunday)

ガロ地区

ジャマルプールのSEP オフィスから車で1時間かかるところにあるフェリー乗り場からフェリーに乗って、ブラフマプトラ川をわたり、さらに車で2時間行ったところにある山岳地帯である。ここは山を越えるとインドという国境近くの地区でガロ民族というベンガル人より日本人と同じ顔立ちをした少数民族が暮らしている。彼らは独自のマンディー語という言語を持っており、キリスト教を信仰している。SEP はこの地区に99年2月、寺子屋を3校開校しました。まだ全学年なく、先生も各校1人だが、女性スーパーバイザーのパピアさんを中心にこれから大きくなっていくだろう。今回はヘモントさんも ACEF スタディツアーとしても初めての訪問だった。



ディグラクマスクール

言語の違うベンガル人とガロ人が同じ授業を受けている。授業はベンガル語で行われ、ガロの子どもたちは家ではマンディー語を使うが、学校ではベンガル語を使っている。Feeder 1クラス、Gradel 1クラス。

ディモルトラスクール

Feeder1 クラスで小さい子どもが多い。

ボシュノツパラスクール

Feeder1 クラスで11, 2歳の子どもの多い。

「どの学校も軒先でやっていた。どの学校もそうですが、子どもたちは少し恥ずかしそうにしています。でも目はきらきらしていて、印象的でした。」

—寿恵の日記より—



自然と共にある人々

菊池 亜紀子

ある本に「文明人は、都会に住み、忙しければ忙しいほど自然に憧れ、自然によって疲れを癒し慰めを得ようとする。」と書いてあったが、バングラデシュに行って私は自然の人間に与える力の大きさ、自然と共に生きる人々の輝きを見た。首都のダッカから汽車で4時間北へ行ったところにあるジャマルプールという農村で過ごした1週間は自然に囲まれ、人々の目の輝きが常にある、便利な電気製品の少ない生活だった。水道の蛇口がなく、必要な水は井戸から汲んで使う。井戸も私たちが泊まっていたオフィスには庭にあったが、村ではきっと村に2、3ある井戸をみんなで共同して使っているのだろう。電気も通っているがしょっちゅう停電になる。しかもそのまま翌朝、もしくは2日後までつかないこともあった。暑くてもクーラーはない。便利で快適な生活を目指して造られた電気製品だが、それらが自然の有難さ、それ以前に存在すら忘れさせていることに気がついた。

私は人々の目が輝いているのは自然と共存しているからではないかと思った。私自身も自然と、人々の目の輝きを見て過ごした1週間で力が与えられ、心が洗濯された。

また、人と人も信頼関係でつながっていた。子ども社会と大人社会があり、子どもは大人の言うことをきちんと聞き、大人は自分の子どもでなくても悪いことをしている子どもを叱る。子ども同志でも年の大きい子が小さい子をまとめて遊んでいる。そしてその遊びはあるもの—自分の体と自然—を使って遊ぶ。日本も昔はそうだったとよく聞くが、私は意味がわからなかったが、人々を見ていて、自分の子どもの頃、確かにそういうのはなかったと思った。

バングラデシュの良かったことをあげてきたが、この国が多くの問題を抱えていることを忘れてはいけない。この良いところを残しつつ問題を解決していく方法をベンガル人と共に考えたいと思う。



08/31/99

KAYO & HISAE (ME)

“In god nothing is impossible” 雷井 寿恵

“In god nothing is impossible.”これはマラカール先生のお話の中で言われた言葉です。神にとって不可能なことは一つもありません。この言葉に私は強く感動を覚え、涙がもうすぐこぼれるほどでした。私はこの言葉を聞きにバンラデシュに来たのではないかと思うほどでした。それほど、この言葉に共感を覚えたのです。

私は親しい友人の強い薦めにより、このACBEFのスタディツアーの参加を決め、何かなんたかわからぬままにバンラデシュに来てしまったというのが最初の感想でした。そして、空港の人の出や街の道路のけたたましさにびっくりして、すごい所に来てしまったと感じていました。

しかし、寺子屋訪問を重ねることに子供達のキラキラとした笑顔、それ、SEPFの活動の素晴らしさを感じると共にそんな思いも薄れていきました。そしていろんなことを考えました。学校に行くということ、教育を受けるということ、そんなことは当たり前と勝手に思っていた私。実はそんなことはない。たまたま日本に生まれたから、学校に行ける。そんなことを考えると、私は神様に本当に感謝です。今の環境に感謝して、もっと勉強しようという気持ちにもされました。

今日で私の大学生活も半分が過ぎようとしています。振り返ると沢山の壁を越えてきたように思います。そして、将来に対しても不安もあります。しかし、“In god nothing is impossible.”です。バンラデシュにおいて、沢山の困難の下でも、SEPFの働きを守り、導いてきた神様のわざを沢山感じられました。その同じ神様が私をも見守って下さる。そんなことを感じ、私はすごく励まされました。

最後にこのスタディツアーに参加し、私はACBEFそしてSEPFの活動を支えていきたいという思いを強くしました。これからのますますの成功を祈ります。

バングラデシュでキラキラ輝くような笑顔にたくさん出会った。道で会ってどこまでも付いてくる子供、寺小屋で出会った子供、SEP 先生方、宿舎の炊事をしてくださった女性達。愛想笑いなんかでない顔一杯の笑いを見知らぬ私にしてくれた。そしてプーバイルとジャマルプールの見渡す限りの田んぼ、広い空、ゲーンと近い星、蛍、バングラデシュの素晴らしい宝物を、子供達に貰った花が両手でも持ちきれなかったように、毎回おいしい食事が余る位たくさん出される様に、たくさんたくさん神様は下さった。

それなのに私は少し固くなっていたと思う。私は慣れない生活をする事でほとんど一杯になっていた。人々の笑顔もとっても嬉しかった反面、戸惑ってしまっている自分がいた。物乞いの人々に首を振り、視線を避け、身を固くしていた。

日本に帰ってから以前のツアー参加者の方々とお話をした時、五辻さんがベンガル語が出来るようになって物乞いをする子供と交流したことを話して下さったのを聞いて、今回のツアー中、儀子さんがある日止まっている車の中にいた時、物乞いをしに来たらしい子供に窓からちょっかいを出されて、日本語だったけれど、笑顔で言葉を返し、車が走り出した時は手を振っていたのを思い出した。あの時、そんな風に気軽に付き合えるのか、と驚いたのだ。言葉はもちろん助けになるけれど、本当は言葉はいらない交流を五辻さんも儀子さんも持たれたのだと思う。私は物乞いをする子供達にお金をあげられないと首を振りながら心の扉を閉めて、心まであげられなくしていたのだと気づかされた。もっと人々とコミュニケーションをとりたい、もう一度バングラデシュに行きたい、と今思っている。

今回のツアーでバングラデシュの教育の現状について等いろいろ学ばされた。どうしてそんな不平等なことがあるんだろう、と悔しく思い、改めて SEP の活動の重要さを思わされた。それでもジャマルプールを立つ日、スタッフの方々とディスカッションでスタッフの方々は「SEP の問題とは何か」と私たちに熱心にたずねられた。私は尊敬の気持ちを強くすると共に何も発言できない自分が少し情けなかった。ACEF、SEP にずっとつながっていてほしい、とヘモンとさんはおっしゃった。バングラデシュでたくさんの素敵な宝を貰ったこと、SEP、ACEF の地道で重要な活動を思うとこれからもつながっていたいと思った。



B チーム

音楽隊

品

KATHIRA

ドレミファソラシ

月日程月

日にち	午前	午後
2日	7時カティラへ出発 1時到着	子供と遠くまで散歩に行く
3日	Satsimulia School 歩き ニコデモさん宅訪問	ヒンドゥーのお祭り見学 紙芝居の訳をスタッフに手伝ってもらう
4日	Kathalbari School バンと歩き ダニエルさん宅訪問	歌、楽器の練習をする 3人ホームステイに行く
5日	Kathira School 歩き Valukshi School ワゴン	カルチャーショー、サリーを着せてもらう スタッフと大縄跳びと木登りをする
6日	Gournady School ワゴン Mahilara School ワゴン	池で泳ぐ、バドミントンの試合をスタッフとする 3人ホームステイに行く
7日	教会	ヒンドゥーの寺院見学。楽団と歌い、踊る
8日	East Bagdha School ボート	日本食パーティー。スタッフとシェアリング
9日	7時半カティラ出発	渋滞に巻き込まれ、4時にダッカ到着

隊員紹介



船戸先生

- ・ オークドンバットがロクせ
- ・ 時々怒鳴る
- ・ 水浴びが好き
- ・ 皆の話を温かく聞いてくれる
- ・ うた

ヨシミ



- ・ 逃げ遅れケバケバな化粧をされる
- ・ ヒーターさんの呪いにかかる
- ・ 現地の学生をとりにする
- ・ うた・リコーダー



サイコ(左)

- ・ カティアスタッフになる
- ・ ベンガル人と化す
- ・ バングラデシュで鶏肉を克服
- ・ ギター



リコ(右)

- ・ 子供好きで教えるのがうまい
- ・ リコーダーがうまい
- ・ バドミントンは苦手
- ・ リコーダー

ヒロミ

- ・ 生まれたての豆腐脳
- ・ 笑顔がカワイイ♡
- ・ バングラデシュで結婚式を挙げた
- ・ ヒロアニカ

ユウスケ

- ・ 男&子供にもてる
- ・ すぐ買物をする
- ・ バングラデシュで結婚式を挙げた
- ・ リコーダー

リョウコ

- ・ フルトでベンガル人を魅了する
- ・ 驚異のトマト好き
- ・ チームの御意見番
- ・ フルト



音楽隊の

3日 Satsimulia School

1時間かけて歩いて学校へ。途中、竹の一本橋を渡った。日本の家より小さい校舎で3クラス。私達も3つに分かれて、一緒に授業を受けたり、歌を歌ったり。最後に、1つの教室に全員集合して、「花」を合奏。子供たちもお返しにベンガルダンスや歌を見せてくれる。

見学後は、ニコデモさん宅に寄って、お茶や、ムリ、ココナッツジュースをご馳走になる。

4日 Kathalbari School

バンガリに乗って出発。デコボコ道では、バンを下りてなかなか大変な道のり。教室では、前日に訳した「紙芝居」に挑戦。高学年の反応は割と良かった。授業の上手な先生の所では、私達まで引き込まれる。お昼の整列、国家斉唱の後、私達の合奏と、全員でエイ・ポッターを合唱した。

午前の授業後ダニエルさん宅におじゃまして、お茶やフルーツをご馳走になる。牧師をなさっていたおじいさんにお祈りをさせていただく。

5日 Kathira School

SEP事務所の裏手にある学校。どこのクラスにも良く見る顔が…。それぞれ授業を見学したり、紙風船で遊んだり。「ボロボロ ガーチェ」(大きな栗の木の下で)の覚えが良くて、子供と楽しい一時。

Valukshi School

ワゴン車に乗って出発。車内では、歌を歌って楽しく移動。午前の授業が終わるまで、外で、集まってきた子供と遊ぶ。すごい人で暑い。2つに分かれて、それぞれ紙芝居と、ボロボロ ガーチェや日本の歌を歌う。その後、子供とゆうすけは大縄跳び。

6日 Gournady School

ワゴン車に乗って学校へ。3年生までしかない学校。ちょうど体操の日だったので、ボロボロ ガーチェ普及作戦。アシュテ(ゆっくり)からタラタリ(早く)まで。子供たちも一生懸命。こちらも手応えありだった。

同じ、カトリックセンター内にあるCCDBというNGOによって、お茶やお菓子をご馳走になる。

学校訪問

Mahilara School

ワゴンで出発。バングラの斜塔？を見つつ学校へ。どのクラスでもボロボロ ガーチェ普及作戦に燃える。炎天下のフィーダークラスにあたった2人は相当暑かったらしい。最後に全員集合で、ギター付「ピクニック」と「エーデルワイス」を合唱。帰りにゴンノディのバザールで買い物。サロワ・カミューズを買ったり、サモサを露店で買って食べたりした。

8日 East Bagdha School

エンジンボートで1時間かけて学校へ。みんな、屋根に上るので、船がゆらゆら。何度も落ちそうになる。どこのクラスでも、ボロボロ ガーチェ普及作戦。黒板などを使って歌の説明もしてみる。授業見学後、校庭にござをひいて子供たちが座り、私達の歓迎会をしてくれる。私達もお礼に合奏と、ポキポキダンスを披露する。

学校の近くのお家で、ココナッツジュースと卵をご馳走になる。

学校訪問で気づいたこと。

- 1、動作付の歌は、子供たちと一緒にできて楽しい。子供が覚えるまでひつこいほどするのがポイント。
- 2、紙芝居は、やさしく短いお話を選んで、高学年でする方が良い。ベンガル語に訳せていたら、そのクラスの先生にしてもらうのも良いと思う。
- 3、子供たちに、詩を詠んでもらったり、歌やダンスをしてもらうのも楽しい。必ず、上手な子、やりたいという子がいる。
- 4、午前中に訪問するので、小さい学年のクラスが多い、スタッフと相談して、いろいろな学年が見学できたら良いと思う。
- 5、片言ベンガル語でも、子供に話し掛けるといろいろと教えてくれて仲良くなれる。一緒に、授業を受けると勉強になる。

আমি গান গাই

カティラ事件

わずか1週間で、我がチームのメンバーが巻き起こした
様々な事件の数々。その中から編集委員が選び抜いた事件を
少しではありますが、紹介します。

+++とりあえず・・・編+++

サイコ、泣く

3月4日、Kathira 滞在3日目にその事件は起きた。この日は、私達と一緒に Kathira に来てくれた Nicadim さんが Dhaka に帰る日であった。しかし、彩子は Nicadim さんを父親のように慕っていたため、その話しを聞いた瞬間、あまりの寂しさに泣いてしまった。そのため、その日の晩禱での長田紀子の話しを冷静に聞くことができなかった彩子。この件に関し彩子は、「ノリちゃんには、本当に申し訳なかった。」と謝罪している。

涼子、重体事件

3月5日、ホームスティ先でこの事件は起きた。Bipul さんの家に泊まった涼子はその日、風邪ぎみだったため、せきが止まらず、Bipul さんから「薬が必要か?」と聞かれた。涼子自身、全然薬を飲まなくても平気だったが、Bipul さんを安心させるためにも、薬を飲むことにした。しかし、Bipul さんは、涼子の「薬を飲む。」という一言で、重病だと勘違いをしまい、staff を呼びに行ってしまったのだ。

そして、この事件で涼子は、日本とは勝手が違うということを実感した。

裕介、病でダウン

3月10日、Bチーム唯一の男子学生参加者、太田裕介が高熱のためダウンしてしまった。原因は、慣れない土地での生活による疲労のせい。なぜなら Kathira での裕介は、staff や子供達に大人気で、毎日昼寝もせずに遊んでいたからだ。熱も一時は40度にもなり、みんなの不安は募るばかり。しかし、なんとか日本に帰ってきて、そのまま病院に向かった(?)裕介でありました。

+++カティラの有名人編+++

ピーターさんの呪い?

教会の役員、ピーターさんは、独特のピーターダンスをする。歌う時はもちろん、縄跳びの時も、バドミントンの試合中も気付くとやっている。つられて一緒にやっている、トランス状態になり、ピーターワールドに連れて行かれる。その呪いの効き目の強さと早さ、驚異的である。今回、何人ものメンバーがピーターワールドに連れて行かれ、なかなか帰ってこなかった。そんなピーターさんの真面目な一面を見たのは、教会の中だけであった。でも、とても親切で、優しい人。

ビール腹の学生と佳美

私達の宿舎には、老若男女、色々な人がやってくる。その中にいつも取り巻きと行動する、ビール腹の大学生がいた。カティラに着いた日の午後、英語で佳美に声をかけていた。次の日からである・・・佳美が青い服を着ていると、夕方彼も青い服。赤い服を着ていると、赤いタンクトップ。彼は、夕方までにお揃いに着替えてやってくるのだ。偶然にしてもスゴイ。実際、ビール腹の彼は佳美を気に入っていた。彼は教会の会計係。カティラに行ったら必ず会えるだろう。ビール腹で一目でわかる。佳美も、'私はビール腹の人で良かった' と後日日記に書いていた。まんざらでもなかったらしい。

+++ベンガル人入門編+++

池の活用法

Kathira の宿舎の前に、大きな池がある。その池はなんとも便利でベンガル人にとって欠かせない存在である。その使い道は、、、、

- 1 食器を洗う。
- 2 staff とお母さんが洗濯をする。
- 3 エビ、トマト、ニワトリ、魚、なんでも洗う。
- 4 staff と近所の人達が水浴びをする。
- 5 その横で私達が泳ぐ！！ うーん、合理的！

ベンガル風木登り

私達の中で、誰より木登りが上手だったのが Paul さん。ノーマルな木登りから、手だけの木登り。果ては、逆さになって頭を下にして登っていた。もちろん日本人メンバーも、髪の毛の乱れなど気にせずに登らせて頂きました。そして、船戸先生も！！

しかし、なぜあの食後の穏やかなひとときが、木登り大会になってしまったのか未だに疑問。それにしても、あの日の Paul さんはサルだった。

これをこなせば、あなたも立派なベンガル人！

+++船戸先生とベンガル人編—裸の交流事件—

暑いとすぐに水をかぶる先生。カティラからの帰り道とうとう……

フェリーの上で?

帰り道のフェリーはぎらぎらの太陽から隠れる所がなく、みんなぐったり。ベンガル人のトラック運転手さんは船の上で水浴び。ああ、気持ちよさそう。と、先生が私達のワゴンの方からルンギ姿で歩いてくるではないか。手には、着替えのルンギも持っている。驚く私達を気にもせず、ベンガル人と一緒に、頭からジャージャー水浴び。啞然とするゴメスさん。先生は、ベンガル人になっていた。

渋滞中にも?

フェリーから降りると、ダッカまで続いているのでは……というほどの渋滞。ワゴンの中は蒸し風呂。直射日光も容赦ない。みんなだらだら絶頂。と、突然。バンとワゴンのドアが開き、先生が中央分離帯を飛び越えて走っていくではないか。ゴメスさんも、オシムさんも、Mr. フナトはどこに行くのか?とオロオロ。当の先生は、ベンガル人に混じって井戸で順番待ち。そして濡らしたタオルを頭にのっけ、ニコニコ帰ってきたのだった。ここでもベンガル流水浴びをしかねなかった。

+++食べ物編 +++

NEW RULE IN KATHIRA

ある日の午後、staffのDanielさんとAmbroseさんとBernardさんが、田んぼで何かをしていた。次の日の昼食。カエルのカレー煮が出てきた。どうやら、あの3人はカエル獲り競争をしていたらしい。すると船戸先生が、「よし!これからはカエルとタニシを食べて、お金を節約しよう! That's a new rule!」と勝手に決めた。すると、Sagorが横にいた彩子に「We don't like it.」と嘸いたらしい。どうやらバングラでは、タニシはあひるの食べ物で人間の食べ物ではないようだ。しかし、今後Kathiraでは、カエルとタニシ獲りのエキスパートDanielさんが、みんなのためにたくさん獲ってくれそうです。

ニワトリの正しい食べ方

たくさんの生き物の命をもらっている私達。ニワトリもそのうちの1つ。ある日の昼食、Bernardさんがなにやら、ボキボキと音を立てて何かを食べていた。彼はなんとニワトリの骨を食べ、中の髓をチューチューすっていた。日本のメンバーはそれを知ってびっくりしたけど、その日以来みんなボキボキ音を立てながら、骨を食べた。そして食べきれない骨はJacky(犬)の胃袋へ。こうするとニワトリはあますとこなく食べられる。これぞニワトリにとって最高の報い!!

水上結婚式

3月8日、最後の学校訪問の日、水上結婚式が盛大に(?)執り行なわれた。新郎 太田裕介、新婦 岩田弘美、神父 Asimさん。そして、新婦の父はDanielさん。この結婚式が行なわれるきっかけとなったのは、水のかけあいだった。船戸先生が何気なく頭に水をかけてから、水のかけあいが始まってしまったのだ。調査によると、水のかけあいはBangladeshの結婚式で新郎、新婦がすることなのだそうだ。なるほど。

独身?????

Kathiraでの2日目のティータイムの後、staffと涼子を除いた日本人女性とのInternational合同コンパらしきものが行なわれた。その後、彩子はBernardを気に入り、弘美はJoseph、そして合コンに参加しなかった涼子はSagorにハマってしまった。特に涼子のSagorの想いは日に日に増すばかり。そして最後の夜、涼子は勇気を出して告白(?)。彼女は、想いを内に秘めたまま別れるのが悔しかったらしい。

しかし、そんな想いも冷めないうちにDhakaに帰ることに……。この時はみんななどんなにつらかっただろう。そしてDhakaに着いてKathiraでの楽しかった日々を思い出し、余韻にひたっていたその時、Farucさんの一言。「Joseph、Bernard、Sagorの奥さんには会ったかい？」思わず涼子はFarucさんに向かって「You tell a lie!!!」Farucさんもびっくりしたように涼子に向かって「Why?」。

なんとあの3人は結婚していたのだ。そういえばSagorの手には指輪がキラキラと光っていた。その後の涼子の暴走は誰にも止められず、その後しばらくSagorの名前を口にする人はいなかった。

(涼子のコメント)

そんな暴走だなんて人聞きの悪い。そりゃあ確かに事実を知ったその日は多少の暴走はあったかもしれませんが、でも、次の日からはまた元気な私に戻りました！
まあ、こんなことがあるのもいいんじゃないのでしょうか。それにしても、嘘はいけませんね、嘘は。でも、やっぱりKathiraのstaffは大好きです。
今度はちゃんと奥さんを紹介して下さいね。

ホームステイ Bチームの思い出

今回Bチームは、3月4日、6日と2回に分けて、スタッフの家や、スタッフの親戚の家にホームステイをすることができました。みんなそれぞれの家に泊めていただき、色々なことがあったみたいです。そんなみんなの感想を紹介します。

3月4日

メンバー ・太田 祐介
・林 佳美
・岩田 弘美

- ・夜9時頃に行ったにも関わらず、温かく迎えてくれた。1時間位、いろんな話をした。言葉は通じなくてもなんとか話できたので本当に貴重な経験をしたと思う。(林)
- ・寝る時に興奮していて、どうして自分がバングラデシュのある村の家のベッドに寝ているのか?と考えてしまった。一晩中落ち着かず、天井を見ていたら自分はベンガル人ではないかと思ってしまうほど不思議な体験だった。(岩田)

3月6日

メンバー ・増田 彩子
・長田 紀子
・森嶋 涼子

- ・当日は寝て起きるだけだった。でも、家が近くて次の日も遊びに呼んでもらい昼食作りの手伝いやおしゃべりができた。温かく迎えていただき、人の温かさに触れ家庭の雰囲気や少し知った貴重で不思議な体験だった。(長田)
- ・朝は山羊、鶏の声と足音で自然と目が覚める。誰に言われなくともみんなが自分の生活を始める。ここには独自の時間が存在していると思った。(森嶋)
- ・スーパーバイザーのピプルさん宅に泊めていただいた。ベンガル語の賛美歌を習いつつ、40分以上歌い続けた。夜は、生後7カ月の赤ちゃんの夜泣きで起きた以外はぐっすり寝てしまった。(増田)

シェアリングから

国歌と国旗

学校訪問でお昼の全員整列を見ることができ、その時に国旗を厳粛に掲げる姿、国歌を全員で歌う姿を見たことから、日本の国歌と国旗について話し合った。

- ・中学校までは少しも疑問を持たず、当然歌うものとして国歌を式の時などに歌っていた。
- ・今の国歌を歌うのには、疑問を持っている。
- ・高校に入って、歴史や先生の話から、国歌を歌うことについて考え始めた。
- ・国歌の意味を分かって歌っている人はどのくらいいるのか？（メンバー内に知らない人がいたので説明する）
- ・若い世代には、日の丸、国歌に戦争のイメージがある。
- ・自分は抵抗無く今の国歌を歌っているが、歌詞の内容がそろそろ変わるべきではと思っている。
- ・独立を勝ち取ったバングラデシュの人々は、国に誇りと自信を持っていることがわかる。それに比べると日本人には精神的な団結力が無いような気がする。

文化

子供たちにカルチャーショーをしてもらった夜、文化について話し合った。

- ・バングラデシュは、大人から子供に、独自の文化、伝統が引き継がれていっているのが良くわかった。
- ・何かお返しにして・・・と言われても、戸惑った。日本舞踊はできないし、盆踊りもあやしい。
- ・自分たちは貧しいとよくベンガル人は言うけれど、自分たちの文化の豊かさについてはいつも自信を持って話してくれる。
- ・日本にもたくさん素晴らしい文化、伝統があるが、あまり若い人に伝えられていないのが残念だ。
- ・日本の歌を学校訪問で歌って、改めて日本の歌の美しさを知った。

バングラデシュという異文化の地で過ごしながら、私達は自分の国日本について考えることが多くあった。違う文化に触れることで、自分たちの生活習慣について客観的に考えることのできる良い機会だったと思う。



宝物

林 佳美

バングラデシュの二週間は、正直言って短いようで長かったような気がします。それは決して悪い意味ではなく、毎日がゆったりとしていて 時間など気にせず遊んだり、散歩をしたりできたからです。農村での生活も毎日笑いが絶えなくて、自分が今まで抱え込んでいたものを、少し解放してくれたような気がします。そして、周りを見渡せばたくさんの人たちの笑顔に包まれて、言葉は通じなくても人のあったかさを感じることができました。確かにバングラデシュは、貧しい国と言われているように街に出てみれば、物乞いの人々が寄ってきて私達に貧しいからお金がほしいということを表示してきます。そういった状況は、本当に辛くて、思わず目を背けてしまいたくなるけれど、自分の目で見据えてこれから考えていくことの大切さを実感しました。そして、人の生き生きと生活している姿、子供達のかわいらしさは格別で、今でも時々子供達の笑い声が私の耳をくすぐります。それから私には、忘れられない出来事があります。それは、初めて寺小屋を訪問した時、抱えきれないほどの花を持っていた私に一人の生徒が自分の教科書を入れていた買物袋を差し出して、私にくれたことです。私は、あのときの感激を忘れることができません。そして、日本に帰って来た今でもあの生徒がくれた買物袋は私の宝物となって引出しの中でキラキラと輝いています。そしてこれからは、引出しを開ける度にあの買物袋が遠いバングラデシュのクラクションの響く街並も、みんなの笑顔も、スパイスのきいたカレーの臭いも、思い出させてくれることでしょう。



『たくさんの出会いと気づき』 長田 紀子

生活習慣、文化の違ったバングラデシュの生活は、驚きと感動の連続だった。日本の生活からみたら目に見えて貧しいと思ったけれど、何故かとても不思議で満たされている感じがしたり、人が、街が“生きている”と実感した。何より驚いたことは、バングラデシュの人が自分の国をととても愛している姿だった。それから、寺子屋では一生懸命勉強している子ども、工夫しながら授業をする先生、近所の子どもたち、その他出会う一人ひとりと接する度に、自分には無いもの、今までは眠っていた感覚に気づかされるようだった。

初めは戸惑うことばかりで不安な顔、困った顔ばかりしていたかもしれないけれど、カティラへ行って以降は笑顔が絶えない自分がいた。人と出会うこと、歩くこと、大声で歌うこと、笑うこと、その他何でもないようなことも含めた今日一日がうれしくて、満たされて、心が一杯になった。そして、日本では忘れてしまっている何か大切なもの、そこにあるのに気づいていないことがたくさんあるように感じた。また、言葉でコミュニケーションがとれないことが辛くもあり、だからこそ伝わるものをたくさん吸収できた。それが何かを言葉で表そうとしても表せなくて悔しいけど、今はそれでもいいかなど。これからの生活の中でどれだけ同じ感覚を感じることができるだろうか、大切なことを大切にできるだろうかを考えて実行していきたいと思う。

スタッフに支えられ守られ、いいトコどりだから言えるのかもしれないけれど、私はバングラデシュが遠い国ではなくなり、とても好きになった。本当に2週間のすべてに感謝をしたい。それから、私自身成長してもう一度バングラデシュを訪れたいと思う。



আমি আপনাকে ভালবাসি

アミ アプナケ パロバシ

増田 彩子

バングラデシュで過ごしていると、私は自然と素直になります。嬉しい時には心から笑い、悲しい時、感動した時には、涙がこぼれます。

2回目のバングラデシュの訪問でした。英語でも、ベンガル語でも、あらゆる手段を使って、スタッフを始め現地の人と話したいと思っていました。なんとか近づきたかったのです。実際、他のメンバーと、毎日少しずつベンガル語を覚えました。遊びに来てくれる子、学校で会った子、毎日ご飯を作ってくれるお母さんと片言でも話せた時の嬉しさは忘れられません。でも、スタッフを始め、先生方や子供と仲良くなれたのは、言葉のお陰ではなかったのです。お互いの仲良くなりた、友達になりたい、知りたいという強い気持ちで、言葉以上の力で、私達を近づけてくれたのです。言葉にならなくても、心が通じる、信頼し合える、そういう経験をしました。

相手に価値が在ろうとなかろうと存在を認めて愛する愛。なんの報いも望んでいない愛。‘アガペ’。私達は、人の価値を愛していないでしょうか？何らかの報いを求めて人を愛していないでしょうか？それが本性としての欲求かもしれません。

でも、バングラデシュでの私は、純粋な思いで、私は‘アガペ’の愛であなたを愛していますと言いたい気持ちで一杯でした。それは、私自身も‘アガペ’の愛で愛されていたからです。豊かな、大きな愛の中にいると、人は古い自分からも自由になり、強くなるのだと実感しました。私は、日本で愛されていなかったのでも、不幸だったのでもありません。でも、バングラデシュでの出会いが、私の心の器をもっと大きく、豊かにしてくれたのは事実です。

遠い日本から子供達、スタッフへの感謝を祈りに変えて届け続けたいです。



ধন্যবাদ
Thank you
ありがとう

醒めない夢

森嶋 涼子

今、とてもうれしいこと。
バングラディッシュを、肌で感じることができたこと。

今、好きな色。
空の色にも負けない、ブーゲンビリアの赤い色。

今、伝えたいこと。
貧しいけれど、豊かな国が地球上にはあること。

今、願うこと。
子供達の物乞いも、貧困も夢であること。

今、美しいと思うもの。
田んぼと太陽しかない、あの大地。

今、気づいたこと。
私の周りにはたくさんの人がいること。

今、恐れていること。
小さな私がこの旅を『思い出』にしてしまうこと。

今、悲しいこと。
私の作るベンガルティーが、あのときと同じ味がしないこと。

今、一番悲しいこと。
あのとき私の周りにあった無数の笑顔が、今は、ないこと。

だけど、これから別の笑顔に会うために、私は夢から醒める。



歌の素晴らしさ

岩田 弘美

私がバングラデシュへ行って一番強く心に残っていること。それは歌だ。
バングラデシュの賛美歌は、日本にはない独特のノリと迫力がある。ダッカの教会で初めて聴いて、鳥肌が立った。私は不思議な感動で胸がいっぱいになり、おもわず泣いてしまった。自分の震えた心の内を表現したいが、うまく文章に表現できない。
なんだか妙な圧迫感も強く感じた。私のいるべきところではないのではないか、と思ったりもした。それでも、旋律に流されて涙はいつこうにとまらなかったのである。そういえば、日本での最初の一泊研修で「エイポッター」を聴いた時も、感動したなあ。
また、日本の歌がこれ程美しいものであったとは全く気付かなかった。バングラデシュで、日本の歌の素晴らしさを発見したのだ。こんなに楽しく歌ったのは非常に久しぶりだった。そして、ピアノやたて笛などをつかって、母国の懐かしい歌を演奏する。とてもゆかいで、めったにできない体験だと思う。

カティラでは、いつも歌を口ずさんでいた。学校までの道のりも、車の中でも、ティータイムの後も。スタッフの方々と私達が共に歌を中心として盛り上がったことが何度もあった。手拍子もたくさんとった。歌は私達を楽しませ、幸せにしてくれる。

またバングラデシュへ行きたい。広大な緑の大地を眺め、ゆっくりと歩きながら歌いたい。今度は、バングラデシュの歌をマスターして、子供達とみんなで歌いたいと思う。



全体シェアリング³/₁₀

〜教育〜

アルバートさんからSEPについてお話を伺った時、アルバートさんは日本人には、日本の子どもには多くの選択権があるとおっしゃった。

しかし、その日の夜のシェアリングの時、本当にそうだろうかと言う声が上がった。確かに好きなものを食べたり着たりする選択権はある。しかし、子どもが、日本人がどれだけ行動の自由を持っているだろうか。

「夜遅い電車に乗っていて、よくランドセルをしょった(塾帰りと 思われる)小学生を見かける。その子の目は死んでいる。」

朝早くから学校へ行き、学校が終われば夜遅くまで塾に行く。このような毎日を過ごす子どもに子どもらしい時間はない。何のためにそんなに勉強するのか—それは将来高収入を得て、安定した生活、人生をおくるため。

「最近起こる学級崩壊は大人の定めた束縛から自由を求めての反抗ではないか。」

話は学級崩壊へ移った。日本の子どもは知的好奇心を失い、ただただ自由を求める。

「学級崩壊は起こるクラスと起こらないクラスがある。それは先生による。私が出会った学級崩壊を起こした先生は子どもと政府が悪く、自分は一生懸命やっていて落ち度はないと言う。ルーズソックスをはく子はすべて馬鹿と言う。そういう先生は子どもの気持ちを考えたことがあるのだろうか。」

「先生がエリートばかりと言うことにも問題があるのでは。エリートに子どもの苦しみはわからない。生徒の苦しみ、喜びに共感できる人が教師になるべきだ。例えば、不登校になったことがある人、中退した人。人生の中で、挫折も一つの芸ではないか。」

その後、小学校の途中から学校へ行かなくなった人と、大学まで進んだ人と比べると、中退した人の方が今、のびのびと自由に生きていると言う2人の人の実例が出た。

夜遅くだったので話し合いはここで打ち切られたが、メンバーの誰もが感じていただろう。何故貧しいはずのベンガル人には目の輝きがあり、幸せの笑みを持っているのに豊かなはずの日本人の目は死んでいるのだろうか。本当の自由とは何なのか。(菊池)

〜 宗教 〜

バングラデシュの人々の生活の基礎を築いているのが宗教。その宗教について…。3月1日、プーパイルで先生方とのディスカッションがあった日のシェアリング。

「あの先生達は宗教に縛られているみたいで世界が狭いと思う。」（祐介）
この意見に対して。

「そういう人は、周りの世界を見る必要もないし、見ないのだから世界が狭いというわけではない。」（寺島先生）

「私は自分の子どもを教会に連れて行きたいと思うし、自分の信じているものを子どもに伝えたいと思う。」（寿恵）

そして、「自分が“ここに真実がある”と思うものを宗教の自由ということから我が子に伝えないのは、本当にそこに真実を見ているのか疑問である。」（寺島）

確かに、同じ宗教同志でなければ結婚できなかつたり、宗教によって拘束されることがあるバングラデシュの世界は、正直行って世界が狭いのかもかもしれない。しかし、それはあくまでも私たちの価値観から見た意見。私自身、日本人に多くいる無宗教といわれる1人。初めは、神を信じるなんて考えもしなかつたし、むしろ引いてしまっていた。

カティラでの昼食時に、アンブロスさんが「もし、自分の息子がクリスチャンでなくなるといったら、勘当だ。」と言った。その時は何も感じなかつた私だが、時が経つと同時に、なんだか羨ましく思えてきた。私はお父さんから何か伝えられているものはあるのかな？もし、お父さんが“そこに真実がある”と思っているものを、私に伝えてくれようとするなら、私は喜んで受けたのに。

今はバングラデシュの宗教のあり方が少し解って、そして“伝える”という点では羨ましくも思える私である。（森嶋）



音楽特集



今回バングラデシュの寺小屋訪問では、AチームもBチームもそれぞれ事前に練習した曲を演奏したり、歌を歌ったりしました。リコーダーや、ピアノ、フルートなどいろいろな楽器を用いて訪問先の子供達に日本の歌を披露しました。そして、今回私達は、「ボロボロ ガチェ普及作戦」と題し、ベンガル語に訳してもらった「大きなくりの木の下で」を子供達に教え込みました。他にも「幸せなら手をたたこう」、「花」なども歌いました。そして、今回の音楽の交流を通して、改めて音楽の素晴らしさを再確認することができました。

- 主な曲目・ボロボロ ガチェ
- ・幸せなら手をたたこう
 - ・エイ ポッター
 - ・花
 - ・ドレミの歌
 - ・ホールディア クッカー



みんなの感想（日記より）

- ・私は、フルートを習い始めて今年で10年目。しかし、今日ほどフルートが重宝されたことはない。以前、先生が「音楽は万国共通だから」と言っていた。まさにその言葉が今の私にはしっくりくる。（森嶋）
- ・授業の途中から歌を歌うことに。”幸せなら手をたたこう””ボロボロ ガチェ”先生と一緒に”エイ ポッター”。子供達はなかなか歌ってくれなかったけれど、恥ずかしそうに「エイ ポッター」と言って嬉しかった。（増田）
- ・朝食後リキシャに乗って学校に行きました。ガタガタ揺れる中、リキシャワラーのリクエストにお答えしてひたすら歌いまくった。（遠藤）
- ・音楽の持つ力はすごいと思った。Aチームはジャマルプールでいつもリキシャで移動していた。リキシャワラーさんはいつも同じ人たちだったが、その人たちは英語が話せず、私たちはベンガル語が話せないのにどんどん仲良くなっていった。それは音楽の力だった。毎日、私たちがリキシャに乗るとリキシャワラーさんは「ガン！ガン！（ベンガル語で「歌」の意）」という。私たちは日本の歌、英語の歌、ベンガル語の歌を歌い続け、ピアノやハーモニカも吹いた。疲れて止めると、「ガンガン！」と催促。だから、いつも歌っていた。ベンガル語の歌も教えてもらった。音楽の力は本当にすごい。

一糸者に歌おう!

大きな栗の木の下で
বড় বড় গাছে নীচেতে

大きな栗の木の下で
বড় বড় গাছে নীচেতে
ボロ ボロ がちエ ニチエテ

あなたとわたし

তুমি এবং আমি
টুমি ইগন আমি

なかよく 遊びましよう

মিলে মিশে খেলা করি
মিলে মিশে কেলা করি

大きな栗の木の下で
বড় বড় গাছে নীচেতে
ボロ ボロ がちエ ニチエテ

よく使った বাংলা バングラ ベンガル語

暑い、熱い ゴロム
 冷たい、涼しい タンダ
 美味しい モジャ
 良い バロ
 きれいで可愛い、上手

シントウール

スゴイ、カッコいい
ダールン

小さい チョット
 大きい ボロ

とても～ クダ、バシ
オネーク

ゆっくり アシユテ
 早く タラタリ

易しい ショホジ

難しい コティン

痛い バタ

OK ティガチエ

存在 アチエ

ない ナイ

ありがとう ドンバット
 お元気ですか ケモンアチエ?
 元気です マミ バロアチ
 年はいくですか? ボヨシゴ?
 また会いましょう アバルカボバ
 値段はいくら? ダムゴ?
 いくつあるの? コタアチエ?

家は何処ですか? バリコタエ?
 何処に行くの? コタエシバン?

意味は何ですか? マネキー?

これは何ですか? エタキー?

分かりません ブジナー

疲れた アミクラント

お腹がすいた アマール
キダハアチエ

眠いです アマール
グーパッチ

お水を下さい パニ ティン

紅茶が欲しい チャーチャー

食べてください アミケチチャー



第16回ACEFスタディーツアー参加者名簿（'99冬）

[Aチーム]

A1	寺島 昭二 テシマアキツグ	400-0031 甲府市丸の内2-32-3	0552-22-4110	牧師
A2	井上 儼子 イノウエリコ	331-0042 大宮市奈良町97-46	048-668-2942	ACEF事務局
A3	江澤 華代 エサワカヨ	297-0136 千葉県長生郡長南町小生田799	0475-47-0356	帝京大理工情報1年
A4	遠藤 聡子 エントウサトコ	336-0022 浦和市白幡6-8-17-301	048-861-5074	青山学院短大専攻
A5	小林 淑恵 コバヤシヨシエ	185-0012 国分寺市本町2-25-14-205	042-327-2174	青山学院短大専攻
A6	菊池 亜紀子 キクチアキコ	221-0811 横浜市神奈川区齊藤分町59	045-413-6365	玉川大2年教育
A7	富井 寿恵 トミヒサエ	182-0012 調布市深大寺東町6-16-41	0424-88-7789	青山学院大法学
A8	吉田 祥子 ヨシダサチコ	160-0012 東京都新宿区南元町4-17-411	03-3353-5470	青山学院短大1年

[Bチーム]

B1	船戸 良隆 フナトヨシカ	359-1132 所沢市松が丘1-20-2	0429-25-4685	ACEF事務局長
B2	太田 裕介 オオタクウスケ	400-0035 甲府市飯田5-18-6	0552-28-6026	二松学舎大3年文学
B3	林 佳美 ハヤシヨシミ	297-0137 千葉県長生郡長南町上小野田395	0475-47-1088	明治学院大2年国際
B4	長田 紀子 ナガタリコ	206-0011 多摩市関戸2-22-13-121	042-375-7898	青山学院短大専攻
B5	増田 彩子 マサタサイコ	181-0015 三鷹市大沢1-12-42	070-6557-4626	ルテル学院大1年文学部
B6	森嶋 涼子 モリシマリヨウコ	180-0004 武蔵野市吉祥寺本町2-32-13-403	0422-20-9884	東京女子大2年現文
B7	岩田 弘美 イワタヒロミ	932-0045 富山県小矢部市中央町3-16	0766-67-0469	北陸学院短大1年

編集後記

§ バングラデシュから帰って来てすぐにこの報告書作りが始まりました。1人でも多くの人にバングラデシュのことを知ってほしいという願いをこめて、バングラデシュでの記憶が薄れないうちに作った報告書です。だから、この本を読んで、少しでも興味を持ってくれたら幸いです。そして最後に編集委員として、また違った面でみんなと一緒にバングラデシュに関わられたことを感謝します。

(林 佳美)

§ 編集のために ACEF に来ては、騒いでばかり。事務局のお2人を困らせてしまったかもしれません…。編集委員をしたことで、スタディツアーについて色々な角度から考えることができました。セミナーまでに作ろうとみんなで協力して、何とか間に合って本当によかったです。これからもずっと ACEF とつながって行きたいと強く思っています。御協力くださった皆様ありがとうございます。

(増田 彩子)

§ 編集委員でもない私は、毎回みんなの邪魔をしているようなものだった。だけど、少しは貢献したつもりです(!?)この紙の集まりが、みんなのバングラデシュの全てではないけれど、形に残すことができたこと、またそれをまとめてくれた人たちがいるということを心に刻んで、「この十数枚の紙たちがみんなの宝物になったらいいな。」と強く願って編集後記とする。

(森嶋 涼子)

§ 面倒くさがりの私が編集委員をやっしまい、ごめんなさい。ほとんど役に立っていないながらみんなについて行くばかりでしたが、みんなの話を聞いたりしながらバングラデシュでの体験を温め直すことができた気がします。この報告書を読む度に思い出が温かくなる電子レンジみたいになってくれたらいいなと思います。そして、これからも生きていく中でツアーの体験をいつまでも活かしていきたいです。このツアーでであった全ての人にありがとうの気持ちです。

(吉田 祥子)

§ 編集委員をさせていただいたことにとても感謝しています。バングラデシュから帰ってきてからも、報告書作成のためにメンバーと連絡をとりあったり、思い出したりしていつもなら日に日に思い出が薄れていってしまうのに、今回は1つ1つの思い出が心に深く刻まれていきました。この報告書を通して私たちの経験をバングラデシュに行かれたことがある方もない方も分かち合えることを願っています。また、SEPとACEFの活動を覚えてお祈りください。

(菊池 亜紀子)



＜バン格拉デシュに寺子屋を贈ろう＞

- ☆ ACEFの会員になりましょう
 - ・団体会員：年額1口 50,000円
 - ・個人会員：年額1口 5,000円
 - ・学生会員：年額1口 2,000円

- ☆ ACEFに献金しましょう
 - ・クリスマス献金（金額は自由です）
 - ・一時寄付金（年間いつでも結構です）

- ☆ アルミ缶回収と献金にご協力ください（年間いつでも結構です）

郵便振替 00100-0-185540

アジアキリスト教教育基金

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

☎ & FAX. 03-3208-1925